



TITLE:

天文語彙 : 天界第十號附録

AUTHOR(S):

海老, 恒治

CITATION:

海老, 恒治. 天文語彙 : 天界第十號附録. 天界 1921, 1(10): 29-32

ISSUE DATE:

1921-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159600>

RIGHT:

天界第十號附錄 (大正九年十二月二十四日第三種郵便物認可)
 (大正十年八月二十四日印刷同二十五日發行)

天文語彙

海老恒治 編

(かの部………續き)

カント (Immanuel Kant)。獨逸の大哲學者、一生涯ケニグスベルヒに居住した。總ての學識に通じ、殊に批評哲學の創始者として有名であるが、天文學にも造詣深く、地球、月、彗星等の運動や形狀について多くの論文をかいだ、中にも一七五五年に發表した「天體論」はかのラプラスの名と並び稱せられる星雲説を述べたものであるが、しかもラプラスに先だつこと半世紀、ニュートンの法則を應用して宇宙開闢論を論じてゐる。而して今日既にラプラスの説が多くの不合理に出會つて殆んど意味のないものとなつてゐるものかゝはらず、カントの説は却つて今尙或る特殊の意義を持つてゐるのは偉といふべきである。(一七二四生、一八〇四死)

カンベル (W. W. Campbell)。米國カリフォルニアオ大

學のリック天文臺長、一九〇〇年キーラーの後を繼いで臺長となり同所の大望遠鏡を使つて星のスペクトルを研究し殊に視線速度問題については今日世界的權威である。近著 Stellar motions があ
 る。日蝕觀測旅行の経験も多い。米國天文學界の元老で明治三十九年英國天文學會より金牌を貰つた。(一八六二年生、現在)

(きの部)

きせし季節 (Seasons)。地球上に於ける氣候の變化に由つて一年を四つに分けると云ふ習慣が何れの國にもある。春夏秋冬が即ち之れである。然し國に由つて分け方が一定してゐない。
 例へば支那の太陰陽曆では。

春 正月より三月迄 夏 四月より六月迄
 秋 七月より九月迄 冬 十月より十二月迄
 然し古代ギリシのトレミーが著したアルマゲストに由れば天文學上に於ては。

春 太陽が春分點を通過してから夏至點に來る迄——其日數九十三日

夏 太陽が夏至點を通過してから秋分點に來る

迄——其數日約九十三日

秋 太陽が秋分點を通過してから冬至點に來る

迄——其日數約九十一日

冬 太陽が冬至點を通過してから春分點に來る

迄——其日約八十八日

今日も天文學上之が使はれて居る。

氣象學上に於ては單に氣候の變動から割出して、

春 三月から五月迄 夏 六月から八月迄

秋 九月から十一月迄 冬 十二月から翌二月迄

右の如く季節が分れて居る。

また北(North)。ほうがくを見よ。

またアメリカせいらん北亞米利加星雲(North American Nebula)。

白鳥座ア星の東にある星雲でドイツ

國ハイデルベルヒのウオルフ教授の撮つた寫眞に

北米大陸の如き形を表はした爲に此の名稱を獲た

のである。

さざり軌道(Orbit)。一般に天體の通る道を軌道と

考へる事が出来るが、多くの場合には遊星や彗星

の如く一定したものを云ふ。ケプレルの法則に由れば遊星の軌道は楕圓であるが、彗星の軌道は多くは拋物線で唯僅か丈けが離心率の大きい楕圓形である。

之等の軌道は大體に於て平面曲線であるから其空間に於ける位置や其形等は次の量で表はす事が出来る。

平均距離(太陽から星迄の) 週期(太陽の周圍の一週點時)

離心率 平均速度(一日の角速度)

軌道面の傾斜(黃道面に對し) 昇交點の黃經

近日點の黃經或は進度

近日點通過の時日

是等のものを軌道要素と云ふ。

さざりよろそ軌道要素(Orbital Elements)前項を見よ。

さなほし黃星(Yellow Star)肉眼で幾分の黃色を帶

びた光の星を云ふ。セツキ式恒星分類法ではその第二種類に屬する。最も著しいものは我太陽が之れである。恒星界に於ては例へばカペラ星等が之

に屬し其他非常に其數が多い。此種の星は全宇宙に於て比較的太陽に近く、青星の様に時に銀河に密集して居ると云ふ事はない。スペクトル中には殆んど凡ての金屬吸收線が見えて居るが帶は殆んど見えない。恒星進化論から見れば此星は青星と赤星との中間に位置するものである。

さほうほうてんもんだい喜望峰天文臺、(Cape Observatory) 英國々立天文臺で南阿ケープタウンの東部に位し一八二〇年創立、以來ヘンダーソン、(Henderson) ストーン (Stone) シル (D. Gill) 等相次いで臺長として活動した。今日二十四時ヴィクトリヤ望遠鏡、十八時望遠鏡七時ヘリオメートル其他有力なる機械を持つて居る。ヘンダーソンは此處でセンタウルス座ア星の最初の視差を測定し、シルは又南天の寫眞星表 (Cape Photographic Durchmusterung) を作った。今日も英本國のグリニッチと相應じて盛に活動して居る。

さむらひさし木村榮、岩手縣水澤の緯度觀測所長理學博士、明治二十年東京帝國大學星學科卒業以來専ら緯度變化の研究をなし明治三十二年水澤に臨

時觀測所長設置以來今日迄其所長として觀測、及研究を續けて居る。明治三十五年緯度變化公式中に乙項を發見し世界的の名聲を博した。其後太陽黒點の計算等もやつたがやはり之も緯度變化問題と關連してゐる。

ざやへアルゴールせい逆アルゴール星 (Antalgor Star) 變光星の一種。光度曲線は平常時略一定し極めて短時間丈け上昇するから恰もアルゴール種の曲線を轉倒したかの様なものであるから此名がある。(星團變光星を見よ)

ざやくかう逆行 (Retrograde motion) 遊星や衛星が地球上を動く場合に、西より東へと進むのが順當であるが時々東より西へ逆に動くことがある。これを逆行と云ふ。殊に遊星の逆行の場合には地球の運動のために起ることが多い。

又彗星の軌道の傾斜が九十度以上なる場合には太陽を中心として之等の運動を見た時に遊星とは逆運動をしてゐる様に見える。此場合にも逆行と云ふ。

さゆうじよりせいだん球狀星團 (Globular Clusters)

多數の微星が集合した星團の一種で其集合状態は凡そ球狀である。今日迄に知られた此の種星團の数は八十箇餘、大體は銀河に近く殊に射手座附近に多く集つてゐる。シャプレー (H. Shapley) の研究に由れば此の星團は我銀河宇宙の外側頗る遠方迄に分布して居るのである。若干の星團中には一種獨特な變光星が存在して居るを見る (星團變光星を見よ)。

さゆうしんりよく 求心力 (Centripetal Force) 或一定點に集中する力を云ふ。例へば太陽系の各遊星はニュートンの法則により常に太陽に向ふ力即ち求心力で引かれて居る。衛星や彗星の場合も皆同じ

キュストナー (F. Kistner) 獨逸ボン天文臺長。一八八四年アベラシオン觀測中偶然緯度變化の事實を發見した。(一八五六年生)

さゆうめんしゅうさ 球面收差 (Spherical Aberration) レンズや鏡で、或物體の像を作る場合に像は光線の中心を離れると漸時歪んで来る。之れを球面收差と云ふ。或程度迄は數個のレンズによつて之を修正する事が出来る。

さよかいさゆう 巨蟹宮 (Cancer) 黃道上に於て經度九十度から百二十度迄を云ふ。太陽が毎年六月二十二日頃から七月二十日頃迄に通過する、昔は之が蟹座と略一致して居つたけれど歳差のために漸時今日の如く異動してしまつた。今日巨蟹宮の原點 (即ち夏至點) は雙子座の西端にある。

さよく極 (Pole) 一般に球面に於て一の大圓から等距離の二點を夫々極と稱へる。例へば子午線の極は東點及び西點であり、又地平線の極は天頂及天底である。然し普通に地球上の極と云ふ場合には赤道の兩極と黃道の兩極とを云ふ場合が多い。銀河の兩極も屢々極と呼ばれる。其中でも最も普通のもののは赤道の南北極である。

地球上にも赤道の北極及南極があつて、何れも近年探検家が踏破したものである。

さよくかん極冠 (Polar Cap) 火星の南極及北極に白色の斑點が見える、之を極冠と云ふ。之は火星表面の季節に由つて増減するものでガリレオ以來學界の興味を惹いて居る。ローウェルは之等が水の氷結した部分であると考へた。